

問題・解答 用紙番号	1
---------------	---

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
理工学部(生命科学科【化学プラス型】)、理工学部(住環境デザイン学科【文系型】)、
薬学部【化学プラス型】、看護学部、農学部【文系型】

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

波線部と同じ漢字を含むものを、それぞれア～オのうちから選びなさい。(十点)

- 1 父はカモクな男であった
- ア 壁にかピな装飾を施す
- イ 複数の重機が現場でカドウする
- ウ 私はその発言をカンカできなかつた
- エ 国内の企業が市場をカセンする
- オ 度重なるゼツカで職を追われる
- 2 シギを得た振る舞いが評価される
- ア 身に覚えのないケンギをかけられる
- イ 友人の家族にベンギを凶る
- ウ 自分のリエウギで物事を進める
- エ 発言のシンギを確かめる
- オ 国会でハツギをおこなう

3 人生の意味についてシサクをめぐらせる

ア 拳束のサクインに目を通す

イ サクゴを防ぐ方法を考える

ウ 労働者をサクシエから守る

エ 三人でサクリヤクをめぐらせる

オ 岩盤をクツサクしてトンネルを作る

4 リジエンのみを追求して事業を広げる

ア 熱帯の気候にシエンノウする

イ 二国間で通商条約をヒジエンする

ウ 集落内を医師がジエンカイする

エ 標的にシヨウジエンを合わせて矢を放つ

オ シエン沢な事業資金を確保する

5 二年目はホンヨウな成績に終わる

ア 調査を重ねてゼンヨウが明らかになる

イ 追及されてドウヨウを隠せない

ウ 弦楽器のソヨウがあるのをうらやむ

エ 帰国した娘をホウヨウする

オ 彼はチユウヨウを重んじる

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

十二世紀、十三世紀は、農村域では、食の先行きに不安を覚えた者たちが **あ** 聖域の森林を次々に滅ぼしてゆき、都市部では、これまた食いぶちを求める者たちが、異教の自然信仰をかかえながら、次々に移り住んできた。¹ゴシック大聖堂はこのような自然の消滅、人口の移動という大きな歴史の変化を背景に、都市のなかに建てられていったのである。

ゴシック様式の大聖堂は、ノートル・ダムという呼称と、つまり聖母マリアの民間信仰と密接に結びついている。

ノートル・ダム (Notre-Dame) とは、イエスの母マリアを表すフランス語だ。これに対応する英語はアワー・レディー (Our Lady) である。いずれも「婦人」、²「女主人」を表す丁寧語 (dame, lady) の前に「我々の」(notre, our) という所有形容詞が付けられている。これは民衆の間でマリアが慕われていたことを証している。キリスト教会によるマリアの正式の呼び方は「至福の乙女マリア」(ラテン語で *beatæ Mariæ Virginis*) であり、教会の公用語であるラテン語には、ノートル・ダムに相当する表現はない。

フランスでノートル・ダムという語が顕著に使われだしたのは一一三〇―四〇年頃だが、それから十数年後に北フランスの司教座諸都市でノートル・ダムの名を持つゴシック大聖堂が次々に建てられていった。ノートル・ダムの名を与えられたのはパリの大聖堂だけではない。ストラスブール、シャルトル、ルーアン、ランス、アミアンなど北フランスの大聖堂の多くが聖母マリアに献じられ、ノートル・ダムと呼ばれた。

イギリスは、フランスより約三十年遅れて、カンタベリー大聖堂の改築工事(一一七四年着工)とともにゴシックの時代に入ったが、どのゴシック大聖堂にもレディー・チャペルという名の聖母礼拝堂が付けられている。アワー・レディーにあたる中世英語が登場するのも一一七五年からのことだ。

このような聖母信仰とゴシック大聖堂の結びつきは、都市化現象という視点から見ると解き明かせる。

農業革命以前の北フランスの司教座都市は、都市集落と呼んだ方がいいほどの人口過疎に陥っていた。十三世紀に天井の高さ五十一メートルの大聖堂(北フランスでいちばん高い)を建てるまでに経済的に発展した都市ボーヴェは、十世紀にはたった五十戸(三百人程度)の人口しか持っていなかった。

農業革命が進捗すると、都市集落の東西南北、近郊遠方さまざまな農村から人口が流入してきた。都市集落が **い** の都市へ生成してゆくわけだが、都市とは人口数だけの問題ではない。他者との共生、言い換えれば別個で無関係の人間の集合という要素も持っている。そこが農村と決定的

に違つところだ。

農村には、地縁、血縁両方の厚い人間関係があつた。同じ土地を共同で耕すという大地に根ざした共生感、同じ血で結ばれているという肉体からの一体感、そうした親密な人間間のつながりが農村にはあつた。都市にはそれがない。まわりに住まう人間は他人ばかりである。職種の違い、風習も異なる、さらには^a氏素姓の分からない者たちばかりである。近い先祖が他国からの侵略者だつたという恐ろしげな隣人もいただろう。言葉もろくに通じない遠方からの移住者もいたはずである。イル・ド・フランス地方の都市へ移住した者たちの出身地は、近隣の農村域だけではなく、百キロ、二百キロと離れた地域（たとえば北西フランスのメーヌ地方、ノルマンディー地方）にもおよんでいた。

勃興期の都市の住民は、農村から出て来て、それまで体験したことのない^b異邦人同士の世界に、互いに疎遠な他者たちの群れのなかに身を投じた。郷土を離れ根無し草の境遇になって見知らぬ者たちの間で暮らす彼らの不安は、これほどの都市化現象が西ヨーロッパ史上初の出来事であつたわけだから、十九二十世紀の都市民の不安とは^c較べものにならない深さを持つていただろう。彼らはこの深い不安を消してくれる新たな共生の原理を切に求めていた。

都市には職種に応じてギルド（同業組合）が存在し、さらに各ギルドを横断し都市それ自体と重なるコミュニヌという制度があつたが、ギルドは親方―職人―徒弟の厳しい上下関係の支配する場であり、コミュニヌは都市の自治と治安のための^dうな法的制度であつたため、新都市住民はそれらの一員になつても個としての不安を癒されることはなかつた。

そもそも農村から都市にやつてきた者たちがみなギルドに加入できたわけではないのだ。未熟練の賃金労働者としてギルドの枠外に置かれた者がかなりの数いたのである。またコミュニヌにしても、加入に制限のある場合（都市に家屋あるいは土地を有する者といつたぐあいに）がしばしばあつて、そうなる都市の人間の半分も参加できなかつた。

都市の誰しもが救われる普遍的な宗教原理が求められていたのであり、そのような^e都市の民衆の欲求にのつて聖母マリア信仰は十二十三世紀のフランスにいつきに広まつていったのである。

その火付け役となつたのは、東方起源の信仰で、ギリシア帰りの修道士によつてイギリスに持ち込まれたのちノルマンディー地方、リヨン、そしてパリに^f伝播していつた「聖アンナによる聖母マリアの無原罪懐胎」の信仰（マリアの母アンナが接吻だけでマリアを身ごもつたという信仰）である。この信仰がフランスで祝日（十二月八日）として祝われるようになったのは一一三〇年、ちょうどノートル・ダムなる言葉が使われたした頃だ。パリでは一一六六年のこの祝日に民間主導（ノルマンディー地方出身の学生が中心）で大規模な祭典が催されたという。ちなみにパリの大聖堂は一一六三年にゴシック様式に改築され始め、西正面左扉口のタンパン（出入口上部の半円形の小壁）には後述する「聖母マリアの死・被昇天・戴冠」のみごとな図像が飾られた。聖アンナのポル

前者の「聖母マリアの死・被昇天・戴冠」の話はかいつまんでいうと、天上のイエスを思慕しつつ死の床についたマリアが、天使たちによつてまずその魂を、次いで肉体を天上に引き上げられて復活を果たし、イエスの祝福を受けながら冠を授かるというものである。

この話は、新約聖書の外典「ヤコブ原福音書」に出自していて、ゴシック期の都市民からは熱烈に愛好されていた。冠を与えられ女王となるほどに母性が称えられているのがその原因だろう。

一見するとこの話はイエスの死と復活をマリアに移しただけで、キリスト教の色彩が強いように思われるが、しかし受難と再生のテーマは、すでにキリスト教以前の古代ギリシアの時代から自然神のための秘教や神話を通して地中海地方に広まっていたのであり、キリスト教の復活譚はどうかその影響を受けていたらしいのだ。

ともかくここで重要なのは、再生復活は母なる大地の相貌であり、とりわけ北フランスの森においてそれが顕著に見られたことである。北フランスの森林はみな落葉樹からなっていた。古代の人々、中世の人々にとって、緑の葉の生い茂る夏と、骸骨のような枯れ木が立ち並ぶ冬の違いは、生と死のコントラストそのものだった。それ故、日照時間が最短の底を打って逆転した冬至の日（当時の暦では十二月二十五日）は、自然界が死から再生する日として、ゲルマンやその他の異教信仰で大切に祝われていた。ケルトの信仰では十一月一日が新年の再生の日として最重要視され、次いで、五月一日も再生のはつきり現れる節目として重視されていた。先に言及した「聖アンナによる聖母マリアの無原罪懐胎」の祝日は、東方からケルト色の強い西端ヨーロッパに入ってきたときいったん五月二日に定められたが、産出というテーマのつながりが分かるようにするためにそのように五月一日の翌日に置かれたのだろう。十八世紀になるとローマ教会は五月を聖母マリアの月として公認し、地母神信仰とそれにつながる外典信仰をすっぱりキリスト教内に包摂してしまう。

問題なのはこの教会側のやり方だ。すでに古代ローマの時代に冬至の日は太陽神ミトラの誕生日として人気を得ていたが、ローマ教会は三八一年にキリスト教化、異教撲滅のためにこの日をイエスの誕生日つまりクリスマスの日に決定したのだ（イエスの正確な誕生日は分かっておらず、それまでは旧約聖書の人類創造の日程に合わせて一月六日に設定されていた）。またケルト信仰で大切な十一月一日は八三五年、殉教者を祭る万聖節に変えられた。

教会側は、キリスト教化を進めるとき、いつもこの手をとる。異教の上にびつたりキリスト教信仰を重ね合わせ、異教の信仰形態を見えなくするのだ（逆に、異教とキリスト教を並存させてしまうと、キリスト教の一神教の体制はくずれてしまう）。パリの大聖堂も、シャルトルの大聖堂も、その地所の真下を掘ってゆくと、ケルト信仰の聖所に行きあたる。

いずれにせよ、教会側によつて公認されることのなかった聖母復活の話を、新都市民という農村出ばかりの人間たちがこよなく愛したことの背景には、明確に見える自然界の再生とそれを養う異教の伝統があったということである。

もう一点、^{IV}これと矛盾する要因も付け加えておかねばならない。

ゴシックに先立つロマネスクの修道院付属教会堂は農村域に多く建てられたが、そこを発信源として「最後の審判」の思想がすでにかなり広まっていた。パリ大聖堂の西正面中央扉口のタンパンも「最後の審判」の図像で占められている。ただし、ロマネスクの場合と違い、裁き神イエスの隣に母マリアがいて、すぐにも語りかけられる状態にある。

都市に出て来た者たちは、イエスの厳しい裁きのことを考えて、天国行きをイエスに執り成してくれる媒介者を求めていた。教会公認の聖人信仰では、殉教ののち聖人に列せられた人物たちは、天上でイエスのそばにいとみなされていた。だが中世の都市の民衆にとってはイエスの母ほどイエスに近い者はおらず、その人物を天上に復活させてしまえば最も有力な口きき役になり、天国への道もいつそう確実になると思われていたのである。ゴシック期の聖母信仰熱には、こうしたキリスト教的な救済願望も強く作用していた。

(酒井健『ゴシックとは何か』一部改変)

問一 二重傍線部 a、c の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 氏素姓

ア 生来の才能・素質

イ 生まれと育ち

ウ 名前と職業

エ 出身地と身分

b 異邦人

ア 別の地域から来た人

イ 異国の人間

ウ 異教徒

エ 遠くから来た旅人

c 伝播

ア だんだんと影響が広がること

イ 多くの人々に共有されること

ウ 代々受け継がれていくこと

エ つぎつぎに広まっていくこと

問一 空欄 あ う に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----------|---|---|------|---|---|------|
| あ | ア | 猪突猛進で | い | ア | 唯一無二 | う | ア | 単調一律 |
| | イ | 意気揚々と | | イ | 正真正銘 | | イ | 公明正大 |
| | ウ | やせ我慢をして | | ウ | 確固不動 | | ウ | 無味乾燥 |
| | エ | 木を見て森を見ず | | エ | 完全無欠 | | エ | 多種多様 |
| | オ | 背に腹はかえられず | | オ | 純真無垢 | | オ | 有名無実 |

問二 傍線部I「ゴシック大聖堂」について述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア フランスのゴシック大聖堂は、フランス語でイエスの母を表す「ノートル・ダム」という名を持つが、そのような表現はフランスに固有のものであった。
- イ 十二、三世紀において、農村で聖域の森林がつぎつぎ破壊されたことで都市部に多くの人々が流入したことが、ゴシック大聖堂の建設の背景にある。
- ウ ゴシック大聖堂は、聖母マリアの民間信仰が都市の人々の間で大いに高まっていたことを示すものである。
- エ ゴシック大聖堂と聖母マリアとの結びつきは、キリスト教会での正式な呼び名である「至福の乙女マリア」という名称のうちに見て取れる。
- オ ゴシック大聖堂は、北フランスの司教座都市を中心に建てられたが、建設当時、これらの都市は都市集落と呼べるような状態であった。
- カ ゴシック大聖堂が建てられた背景には、都市に流入してきた、たがいに疎遠で根無し草の境遇に置かれた人々が深い不安を持っていたことがあった。

問四 傍線部Ⅱ「都市の民衆の欲求にのって聖母マリア信仰は十二―十三世紀のフランスにいつきに広まっていった」とあるが、これについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 都市には職種に応じてギルドという制度やギルドを横断する自治と治安のためのコミューヌという制度があったが、都市の民衆の全てに安心を与えるものではなかった。

イ 「聖アンナによる聖母マリアの無原罪懐胎」の信仰は、聖母マリアを崇高な母なるものとして信仰するきっかけを作った。

ウ 聖母マリア信仰は、ヨーロッパ各地において、それぞれの土地に根ざした形で古くから信仰されてきた地母神信仰と同じような固有性を持っていた。

エ 聖母マリア信仰の普遍性は、教会によって正統性を認められていない外典、偽典に依拠することで実現された。

オ 聖母マリア信仰は母なる大地の神、自然神への信仰であり、母性を強調することで自然との結びつきを強めようとした。

問五 傍線部Ⅲ「受難と再生のテーマは、すでにキリスト教以前の古代ギリシアの時代から自然神のための秘教や神話を通して地中海地方に広まっていた」とあるが、受難と再生はキリスト教においてどのように扱われたのか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 聖母マリアが死の床についたとき、天使によって魂と肉体が天上に引き上げられ、復活を果たし、冠を授かるという話をイエスの死と復活になぞらえた。

イ ゲルマンの異教信仰において、自然界が死の冬から再生を始める日として、冬至は聖なる日であったが、キリスト教会は、それがイエスの死と復活と同じものとみなした。

ウ キリスト教では、キリスト教以前の受難と再生のテーマは、異教のものであるとして、キリスト教の信仰とは別のものであるとされた。

エ 異教信仰において重要視されてきた受難と再生の節目の日をキリスト教の信仰に重ね合わせることで、異教の信仰を見えないものにしてしまった。

オ 都市の人々が熱烈に愛好した「聖母マリアの死・被昇天・戴冠」の話は、キリスト教以前のものであるとして公認されなかった。

問六 傍線部Ⅳ「これと矛盾する要因」はどのようなことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 聖母マリアを信仰しているにもかかわらず、マリアを他の殉教者と同様、最後の審判の前に復活を逃げているとみなしていたこと。

イ イエスによる厳しい裁きを受けるよりも、聖母マリアによつて救済されることを求めていること。

ウ 聖母マリア信仰の背景に、最後の審判を経て天国へ行きたいというキリスト教的な動機があつたこと。

エ 聖母マリアへの信仰を強く持っていたのに、最後の審判に当たってはイエスの母としてイエスのそばにいと考へたこと。

オ ロマネスクの時代に最後の審判の思想が広まっていたが、ゴシックの時代に聖母マリア信仰が熱烈に支持されたこと。

III

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

アメリカの歴史学者アルフレッド・W・クロスビーは『エコロジカル・インペリアリズム』のなかで、ヨーロッパの大国が、南北アメリカ大陸・オーストラリア・ニュージーランドなどの「ネオ・ヨーロッパ」で原住民を征服し、麦類や家畜などを生産する食糧基地に変えていく過程で、雑草・病原菌・家畜などの人間以外の生物がどのような役割を果たしたのかを論じている。ヨーロッパから持ち込まれたこれらの生物やその種子は、征服者たちの意図や予想とは無関係に征服地の生態環境を変化させ、破壊し、それが、征服に力を貸していく。マスケット銃やライフル銃などの火器だけではなく、天然痘やオオバコやネズミも関わる征服の様相を、クロスビーは鳥瞰^わ図のような叙述で明らかにした。こうした過程を題名の「エコロジカル・インペリアリズム」という言葉に込めたのである。

1、クロスビーの「エコロジカル・インペリアリズム」の分析は九〇〇年から一九〇〇年までであり、とりわけ、大航海時代以降の西洋の帝国主義を扱っている。私たちが「帝国主義」と聞いてイメージするような、二〇世紀に華々しく展開する資本主義の発展段階としての「帝国主義」については論じていない。ここでも、ひとまず、大航海時代以降のヨーロッパの国の植民地獲得のあり方を帝国主義と呼ぶとしよう。だが、それでも、クロスビーの議論を、そのまま帝国日本の水稻の品種改良に当てはめることはできない。日本は、スペイン・ポルトガル、あるいはイギリスほどの大きな帝国を築いたわけではなく、比較的生態系が似通った地域にその支配の手を伸ばしていったからである。もちろん、樺太と台湾では気象条件はまったく異なる。しかし、たとえば、スペインが南アメリカを制圧したとき、あるいは、イギリスがオーストラリアの植民を行なったときの生態学的なコンタクトゾーンのダイナミズムは、雑草・病原菌・家畜のどれをとっても、「小帝国」日本とは比べものにならないだろう。

2、帝国日本が近隣の国々に「帝国」を形成していく時代は、むしろ、科学に基づいた人為的な生態学の改変が導入され始めた時代であった。偶然性は排除され、必然性が王座を占める。農業史の文脈で言えば、やはり、遺伝学が果たした有用な植物および動物の品種改良のインパクトは圧倒的だったと言わざるをえない。異世界の種子が服に附着したまま海を渡り新世界に根を張るのではなく、国家によって管理された新しい種子が、為政者の意図と計画に基づいて植民地の生態系を変化させていくことが主要な現象であった日本の帝国支配に、偶然性を強調しがちで、環境決定論的ニュアンスの強い¹クロスビーの議論をそのまま応用することはやはり危険である。しかも、導入されたのは「品種」であり、生物分類学的には同じ種として分類される。種の中の微妙な差異を利用して、現地の農業を急速に変えていく試みは、遺伝学の実験によるのみ可能であった。

クロスビーは、「ヨーロッパ帝国主義」の起源、より詳細には、なぜ、地球上にはヨーロッパ人

がこんなにも拡散し居住しているのかを明らかにするために、エコロジカル・インペリアリズムという言葉を用いた。それゆえ、彼が、一九〇〇年で叙述を終えることはむしろ自然なのかもしれない。だが、科学時代の帝国主義を論じることで、クロスビーの問題提起はもつと深く深い意味を持つのではないか。二〇世紀初頭にヨーロッパ列強の植民地分割が飽和状態になり、それが第一次世界大戦をもたらしたが、戦後の生態系を通じた帝国統治の構造は、今度は、後発の帝国であった日本によって、メンデルの法則に基づいた品種改良という最先端の技術を用いて、大々的に展開された。これは、遺伝学の導入によって、エコロジカル・インペリアリズムがまったく新しい段階に入ったことを意味する。その日本の帝国主義を第二次世界大戦で打ち砕いたアメリカが、その日本の植民地育種の遺産を一つの土台として、途上国の飢餓を救済する緑の革命を演出し、遺伝子組み換え技術を用いた多国籍バイオ企業の意図的な生態学的世界支配を担うようになった、という歴史は、七三一部隊の生体実験のデータがアメリカに流れたのと同様に、「ヨーロッパ帝国主義」の例外ではなく、その帰結として見るべきだろう。

ちなみに、新しいエコロジカル・インペリアリズムを担った遺伝学は、もちろん、作物の品種改良だけに应用される科学ではなかった。一九四一年一月二六日付夕刊の『東京朝日新聞』に、「生活科学問答 遺伝と優生の巻④ 生かせ『優生手術』結婚にも科学的判断が肝要」という記事が掲載された。質問者は、自由学園教授の羽仁説子、答えるのは、一九四〇年五月一日施行の「国民優生法」成立に尽力した厚生科学研究所教授の川上理一である。奇妙なことに、ここに、寺尾博の名前が拳がっている。

問 メンデルにしても植物によつて大法則を発見し、それがまた人間の遺伝の法則であつたわけですね。

答 植物の育種学はほとんど遺伝学の原理を応用したものです(°) 稲は元来寒い所を嫌ふ植物なんです、寺尾博士の研究によつて東北地方の冷害に耐へうる品種を作りだすことに成功しました。人間も生物である以上こんな風に遺伝法則を応用して優秀な人物をつくり出すことも不可能ではないと思ひます。

この小さな問答からも明らかなように、遺伝学の枠組みのなかでは、断種などを用いた「淘汰」も品種改良の一つにすぎない。だとすれば、^{*}〈富国〉に多収の夢を見て肥料を投じた永山の農民にせよ、^{*}札東で妻の頬^{ほほ}を叩いた台湾の農民にせよ、自分たちの預かり知らぬところでもつと大きな科学の体系に絡め取られていたことになる。この意味においても「稲も^{また}亦大和民族なり」という寺尾の比喩は、決して単なる比喩ではない。「稲」も「大和民族」も、遺伝学の視点からすれば、品種だからである。

この遺伝学の発展を背景に、² 支配地の、植物・動物・人間の「改良」が行なわれていく事態を含め、たとえば、クロスビートのエコロジカル・インペリアリズムの概念を再構築する必要があるだろう。近代以前の「帝国」形成過程のなかではかなりの部分を偶然性に支配されてきたエコロジカル・インペリアリズムは、しかし、植民地の空間的分割競争が激しくなる一九世紀末から二〇世紀前半の時期にメンデルの法則が再発見されることで、より意図的にかつ能動的になつていく。第一次世界大戦後に、各列強の食糧政策が保護主義的色彩を帯びるようになると、資源が乏しく、植民地も相対的に小さい後発工業国であった日本は、育種技術を農業生産の要の一つに据えていく。それは、狭義の植民地ではないにせよ、日本の工業地帯の周縁であった北海道や東北地方の開発を皮切りに、台湾・朝鮮・満洲にまで及んだ。クロスビートの議論では見落としがちな人為的・能動的・計画的な性格が前面に出てくる。

すでに述べてきたように、エコロジカル・インペリアリズムは、第二次世界大戦後の植民地の独立以後も、遺伝資源を独占する大規模な多国籍種子企業によって担われ続けている。アジア・アメリカ各国が宗主国から独立を果たし、実質的な植民地の時代が終わったあとでさえ、「支配」が完全に消えていないということは、ポストコロニアリズム論などでこれまで繰り返し論じられてきたが、³ この支配のエコロジカル・インペリアリズムは、近年ますます肥大化する一方である。しかも、それは、保護貿易から自由貿易へと国際経済の基調が変化していく一九八〇年代以降も、次第に強くなってきている。この時期、育種目標が肥料耐性から除草剤耐性へ、担い手も国内外の公的機関から民間機関へと移行しているが、本質的な支配構造は変わらない。実のところ、遺伝子を通じた食糧生産支配は、政府の市場への介入を極限にまで排除する自由主義と相性がよい。自由貿易のなかでも、遺伝子操作によって他国の農業生産構造への介入が可能だからこそ、市場万能主義^①を喧伝できるのである。

旧来の帝国も、植民地の生物資源を確保し収奪するという意味で生態学的な植民地統治を行っていた。だが、冷戦期のアメリカが自由貿易主義とセットで全面的に展開し始め、さらに発展しつつあるエコロジカル・インペリアリズムが、クロスビートのエコロジカル・インペリアリズムと異なるのは、人間と人間以外の生物双方への「統治」を可能にする「遺伝子操作」という方法が用いられていることである。それは、植物の種子と動物の生殖と人間の医薬品を通じてなされる。ただ、当時も現在も、人間の遺伝子を操作することと、動植物の遺伝子を操作することを有機的に結びつけて統治システムを構築する段階には至っていない。二一世紀の帝国主義が、国家の枠を超えて、遺伝子操作技術をはじめとするバイオ・テクノロジーによって人間と人間以外の生物を同時に支配するという、新しい段階に突入することは間近に迫っているように思われる。医薬品産業と種子産業はしばしば同一の企業に担われている。古い時代の i が新しい時代に ii になることで、歴史は進展してきたからである。

厄介なことに、エコロジカル・インペリアリズムは、旧来の植民地統治よりもいわば人当たりがよく、意識されづらい。スペインやポルトガルなどの帝国は、植民地を、生態学的のみならず、社会的にも、政治的にも大きく変え、それはしばしば壮絶な環境および人間の破壊を伴った。しかし、一九世紀から二〇世紀の帝国には、「小帝国」日本も含め、すさまじい破壊行為とともに、生態学的な「管理」の側面も現れた。二〇世紀後半の覇権国家アメリカは、その遺産を継承しつつ、植民地を直接統治するというコストを避け、そのかわりに、世界各地に軍事基地を置くばかりでなく、遺伝学を用いた生態学的な管理を前面に押し出している。

この意味で、帝国主義は、現象としてつねに生態学的でもあったのである。ただ、二〇世紀に入ってその質が変わったにすぎない。この意味で、『東京朝日新聞』の記事の「政府の頭が単なる救済から科学的征服へと転向した」という表現は、きわめて^②示唆に富む。つまり、品種改良の発展は、被災者たちの「救済」に置き換わるに足りうる存在だ、ということである。ちなみに、一九四四年二月十八日付の『朝日新聞』朝刊が寺尾博の学士院賞授賞を報じたとき、「『米の東北』の救世主的存在として寺尾博士はあまりにも有名だ」と述べていた。科学は自然の猛威を克服し人々に安寧と秩序をもたらす、という一般的な科学認識が、ここで忠実に体现されている。稲の細胞核に収められている遺伝情報を変異させるという科学的行為は、単に、生物学的な変化をもたらすだけでなく、これまでの社会的文脈を抜きにして、現実の困難を一挙に変える力を持つ。そのすさまじいエネルギーを「征服」や「革命」という言葉で表してみたくなるほど、品種改良がもたらす物質的および精神的変化は、生態系から人間社会に至るまでを包括するような、きわめてダイナミックな変化になりうる。しかもそれは、被支配者である生活者の願望と密接な関係を結びつつ、徐々に拡がっていく。こうした変化は、もちろん、企業の用語では市場開拓である。化学肥料に高い反応力を示す種子を播いたばかりに、大企業から化学肥料を定期的に購入せざるをえない農民たちは、「自由競争」のなかであっても、企業にとって都合の良い顧客となる。その企業の欲望を覆いかくすためにも、緑の革命は、赤の革命、つまり社会主義に対抗する「革命」を装う必要があった。ここに、植民地時代のあとの「支配」の^③妙味がある。

一九四一年六月六日、『読売新聞』の「好日随想」というコーナーに、寺尾博の短いエッセイが掲載された。肩書きは、「農事試験場長・農博」、タイトルは「感銘する言葉」である。ここで挙げられたのは、イギリスの法律家バーケンヘッド伯爵E・F・スミスの次の言葉である。「科学研究の結果は国の富を支配するのみならず、人々の信念を支配する」。寺尾はこう解釈している。「百年後の民族は」「科学研究の結果によつて断乎たる信念を持つに至る」。寺尾の予言は、現時点も進行中である。地球上の農地は、均質な遺伝情報で満たされつつある。しかし、まだ地球には、「断乎たる信念」を持つことを躊躇させるような科学技術の事故や事件があとを絶たない。農業の進化とともに、害虫も進化し続けているし、モンサント警察は、風や人間に運ばれて拡散しようとする種

子を躍起になって追跡しようとしている。そして、そのような「科学的征服」の綻びにこそ、種を播く人が種を選ぶ自由を奪還する根拠が存在するのである。

(藤原辰史『稲の大東亜共栄圏』)

* 〈富国〉……北海道で育種された、新しい水稻の品種。

* 札幌で妻の頬を叩いた……台湾に導入された新しい品種の水稻の栽培を拒む人々に対して、増産が見込めることを根拠として導入を推進した人々がいたというエピソードを指す。

問一 空欄 ・ に入る語句として、最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|-----------|---------|
| 1 ア また | 2 ア さらに |
| イ つまり | イ それゆえ |
| ウ ただ | ウ しかし |
| エ にもかかわらず | エ たとえば |
| オ そして | オ いわば |

問一 波線部①～③の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| ① 喧伝 | ② 示唆に富む |
| ア 実際とは異なる内容を知らせること | ア 深く考えるきっかけを与える |
| イ 効果を述べて理解させること | イ 多様な解釈の可能性を持つ |
| ウ 分析して状況の把握に努めること | ウ 時代や状況に合っている |
| エ 物事がはかどるように、推し進めること | エ 的確に要点をとらえる |
| オ 盛んに述べて世間に広く知れ渡らせること | オ 本質的なことを述べる |
-
- | |
|-----------------|
| ③ 妙味がある |
| ア 嫌悪感を抱かせる |
| イ おかしな部分を含む |
| ウ 圧倒的な存在感を放つ |
| エ 何とも言えない趣がある |
| オ 他を寄せ付けない凄みがある |

問三 傍線部1「クロスビ」の議論をそのまま応用することはやはり危険である」とあるが、その理由について述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 西洋の大国が新大陸に進出したときは異なり、想定していなかった環境破壊を植民地にもたらしたから。
- イ 西洋の国々の支配地域と違って、日本の支配地域は地理的に狭く、気候条件を同じくする地域にとどまったから。
- ウ 西洋の国々の植民地獲得のあり方は帝国主義と呼べるもので、現地の人々の土地を食糧基地に変えていったから。
- エ 西洋の国々とは対照的に、植民地の生態系を科学的に支配したわけではなかったから。
- オ 西洋の大国が支配した地域に比すると、帝国日本の支配した地域の生態学的な偏差が小さかったから。
- カ 西洋の国々と違って、遺伝学の成果に基づく品種改良という最先端の技術を用いて帝国を統治したから。

問四 傍線部2「支配地の、植物・動物・人間の「改良」が行なわれていく事態」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 農業の生産性を高めるために育種技術を用いること。
- イ 稲の品種改良は植民地での食糧不足を解決するためになされたこと。
- ウ 遺伝学の知識に基づいて改良した品種を現地で生産すること。
- エ 作物の品種改良と優生学とが関連していたこと。
- オ 稲の細胞核に取められた遺伝情報を変異させること。

問五 傍線部3「この支配のエコロジカル・インペリアリズムは、近年ますます肥大化する一方である」とあるが、肥大化するエコロジカル・インペリアリズムについて述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 遺伝子操作という科学的技術によって、人間と人間以外の生物双方を支配するという新しい形の植民地主義が見られる。
- イ 宗主国から独立したアジアやアフリカの国々が主導するバイオ企業が、他国の食糧生産を支配するようになった。
- ウ 赤の革命の遺産を一つの土台として、途上国の飢餓を救済する緑の革命を演出して生態学的世界支配を推進した。
- エ 西洋諸国が非西洋社会を支配する植民地主義が、自由主義に取って代わられたことで西洋支配が終焉を迎えた。
- オ 遺伝子組み換え技術を用いた生態学的支配を前面に押し出すアメリカの公的機関が、世界各地の農業生産構造に介入している。
- カ 被支配側の人々の需要に応じて物資を供給するという市場主義の論理が、生態系のみならず被支配者の社会を変えている。

問六 空欄 ・ に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア i 相対 ii 絶対
- イ i 生産 ii 破壊
- ウ i 偶然 ii 必然
- エ i 帰結 ii 原因
- オ i 支配 ii 独立

問七 傍線部4「『科学的征服』の綻び」の事例として、最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 戦争中の生体実験のデータが他国に流れること
- イ 育種の目標が肥料耐性から除草剤耐性へ変わること
- ウ 植物が人間とともに移動して別の土地で根を張ること
- エ 冷害に耐える稲の品種を作り出すこと
- オ 地球上の農地が均質な遺伝情報で満たされること